

シリーズ

沖縄戦を語り継ぐ(2)

沖縄戦を語り継ぐ会会長 高田 俊秀



日系二世米兵によって集骨され建立された南冥の塔で手を合せる高田さん(摩文仁)

ている姿に、何かしら神々しいものを感じたのは私だけだったのであるうか。

兵士達にとって従軍看護婦は、高嶺の花でありながら憧れの的でもある。年も若くすくぶる付の美人婦長の姿見たさに厠通いをし、彼女達の近くで牛歩戦術をとっていた訳である。

当時の日赤の婦長は、将校並みに扱われ、兵が話しかけることは先づない筈なのに、素早い奴が居たもので、桐原・宮崎という姓を聞き出しているたのには驚かされた。

私は、この直後ふとした奇遇から四四旅団の小木中尉と出会い、田中一等兵と共に富山丸に乗船した。六月二十九日朝、徳之島沖で魚雷攻撃を受け遭難したが、田中と共に九死に一生を得て、原隊復帰した。

不審に思いつた。眠るのも坐ったままである。それに船室特有のペンキと重油の強烈な臭いに苛まれ、加えてエンジン振動と熱気。明らかに窓一つない船艙の通路に揺らぐ裸電球に、幼い頃読んだ奴隷船の挿絵が重り合うのも物寂しい。

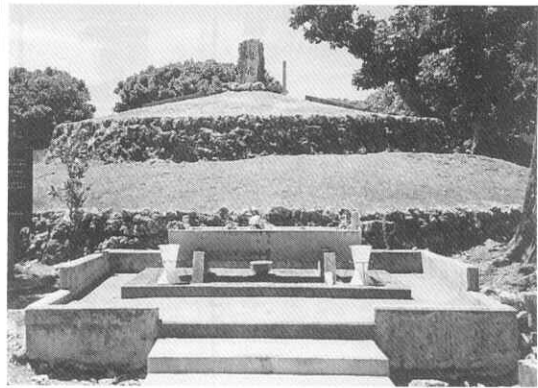
防諜上の理由から兵士達は厠の外甲板に出ることは固く禁ぜられていた。だが極悪の環境を脱

するといふドラマも展開されたのであるが、今回はこれを割愛して本題の十・十空襲に戻ろう。

その前にお断りしておきたいのは、記述するに当たって、何等の資料・記録によらず、あくまで自らの体験と行動に基づく記憶のみによって、拙筆を進めたいと思う。

ただ、一兵卒の記述に過ぎないので視野が狭く、決して全体を把握したものではないと云うことを御理解頂きたい。

安里の片倉製糸工場に駐屯していた有線中隊長に部隊長命令を伝達したあと、部隊本部を全由して田辺副官に部隊長の現在位置を報告したのであるが、どのようなコースで走行したかについては全く記憶を喪失しているのである。それと対照的に、田辺副官位置から石原軍曹、赤穂隊長と共に部隊位置に走り出したときの記憶は、つい昨日のこのように蘇る。



戦後住民により35000体の遺骨が納められた魂魄之塔

尤もこのときのこととは戦後六十年近くなろうとするのろつとするのろつと、時折り夢の中で再現し、もどかしい思いを断ち切れ

ないでいるからであろう。ところで肝心の部隊長位置はどこか。

部隊本部から鉄道線路を隔てた八幡山に高射砲隊の陣地があり、山裾を二千米位削り貫いて、頑丈な地下壕が完成間近であった。

実は部隊長は此処に避難しており、前号に記したように、「命令、有線中隊長は直ちに有線網を構成すべし。余は現在地にあり」と。下命されたことから、この高射砲隊の壕が部隊長位置となつたのである。

ここに行くには、高さ六七米の築堤に設けられた暗渠を腰を屈めて通り抜けねばならない。

丁度米軍機が頭上をいかなかった。今のうちにと暗渠を目差して走る。百二十米位の遮蔽物は何もない。暗渠を抜けなければならぬのである。営内靴を脱いで走り出した途端、いな

かつた苦の米軍機が一機真嘉比方向から機材庫の屋根すれすれの低空で頭を出した。搭乗員と目が合ったように、これは危な

いと思うと同時に、そのグラマン野郎急旋回してダダダダと機銃掃射、同時に目の前でグワグワとロケット弾が炸裂した。漸く線路の盛土下の草叢にしがみ込んで、ギューンと金属音を残して急上昇したグラマンに、ホツとして立上った瞬間、近くの盛土がピカッと光り土が跳ね上がった。「ワウッ」と唖然仰天、思わず伏せた体すれすれに機銃弾が集中した。

「おい、大丈夫か。しつかりせろッ」と、何時の間にか追いついたのか、石原軍曹と赤穂隊長に引き起こされた。恐らく失神していたのではなかったかと思っている。

暗渠まではあと数歩のところであった。(注)一、奇声と聞こえたのは、沖縄の方言で非常に驚いたときに発する言葉のこと。

(注)二、下鶴少尉が軍や軍隊の非常理を教えられた。五味川純平「人間の条件」、大岡昇平「レイテ戦記」、野間宏「真空地帯」、高木俊郎「インパール」、大西巨人「神聖喜劇」等々です。身近なところでは、近所の老人から戦友の弔辞作成を依頼された折、戦闘の状況や敗残兵としての体験を直接聞きました。これがきっかけで、久留米の師団が参加した作戦

刀を識名信子に持たせていたのは、前屈みで両手を使うとき、軍刀は邪魔で動作できなかったからである。漸く暗渠を通り抜け、部隊長の木元治少佐に

『戦争と私』

理事 西土 純一

私は、昭和十八年十月十五日生れです。太平洋戦争の真只中、日本軍は態勢を整えた米軍に対し劣勢を余儀なくされていた頃であり、その一週間後には神宮外苑で学徒出陣式が挙行されたのを後で知りました。以後は負け戦が続いて、二十年八月十五日を迎えることになりました。その僅か一カ月前、我が家は空襲により全焼しました。ポロに包まれて防空壕に入られていた私は、親からよく生きておれたといわれたものです。私の戦争体験はこれだけです。

長じて、色々な文学作品を通じて戦争の悲惨さや軍隊の非常理を教えられた。五味川純平「人間の条件」、大岡昇平「レイテ戦記」、野間宏「真空地帯」、高木俊郎「インパール」、大西巨人「神聖喜劇」等々です。身近なところでは、近所の老人から戦友の弔辞作成を依頼された折、戦闘の状況や敗残兵としての体験を直接聞きました。これがきっかけで、久留米の師団が参加した作戦

復命を済ませ、任務達成の満足感を味わうことができた。「部隊長殿、当番の高田は軍装を整えるため只今から内務班へ行ってもよくありますか。」

「よーし」壕から出ると、第二波攻撃を終えた米軍機は、編隊を組みながら帰投を始めていた。(平十四・七・三十一記)

野に、あるいは南の島や海に棄てられたのですから、なおさらのことと思えます。時代と状況は全く異なりますが、不慮の事故で肉親を亡くした遺族が必死に遺体を探し求める姿とその心情は、「沈まぬ太陽」御巣鷹山篇で山崎豊子がリアルに描いています。

前号で、戦没者概数が二百四十万人のうち、百十六万人の遺骨が遺族の許に帰っていないことを知り、戦後はまだ終わっていないはずだと、本来自ら国の責任でやるべき遺骨収集、遺品返還をボランティアでやっておられる塩川さん達の行為には頭が下がります。私も本会のメンバーに名を連ねている以上、この事業に微力を尽くさなければと思っております。

目下のところ、私にとつてこれが戦争、ひいては平和と直接関わることで、できる唯一の機会ですから。

昭52年民家近くの畑で12体の遺骨が発見されたと語る高田さん(摩文仁)



昭52年民家近くの畑で12体の遺骨が発見されたと語る高田さん(摩文仁)

- (宮崎) 下鶴虎盛少尉 (戦部) 福田准尉(不祥) 船橋は、まるで養蚕のようになり、三段に仕切られ、胡座をかいても頭が仕えて真っ直ぐ立てることはできない。そのような場所に背囊と装具を抱いた状態で詰め込まれ、足を延ばすことすら叶えられず、眠るのも坐ったままである。それに船室特有のペンキと重油の強烈な臭いに苛まれ、加えてエンジンの振動と熱気。明らかに窓一つない船艙の通路に揺らぐ裸電球に、幼い頃読んだ奴隷船の挿絵が重り合うのも物寂しい。防諜上の理由から兵士達は厠の外甲板に出ることは固く禁ぜられていた。だが極悪の環境を脱

- (宮崎) 下鶴虎盛少尉 (戦部) 福田准尉(不祥) 船橋は、まるで養蚕のようになり、三段に仕切られ、胡座をかいても頭が仕えて真っ直ぐ立てることはできない。そのような場所に背囊と装具を抱いた状態で詰め込まれ、足を延ばすことすら叶えられず、眠るのも坐ったままである。それに船室特有のペンキと重油の強烈な臭いに苛まれ、加えてエンジンの振動と熱気。明らかに窓一つない船艙の通路に揺らぐ裸電球に、幼い頃読んだ奴隷船の挿絵が重り合うのも物寂しい。防諜上の理由から兵士達は厠の外甲板に出ることは固く禁ぜられていた。だが極悪の環境を脱

- (宮崎) 下鶴虎盛少尉 (戦部) 福田准尉(不祥) 船橋は、まるで養蚕のようになり、三段に仕切られ、胡座をかいても頭が仕えて真っ直ぐ立てることはできない。そのような場所に背囊と装具を抱いた状態で詰め込まれ、足を延ばすことすら叶えられず、眠るのも坐ったままである。それに船室特有のペンキと重油の強烈な臭いに苛まれ、加えてエンジンの振動と熱気。明らかに窓一つない船艙の通路に揺らぐ裸電球に、幼い頃読んだ奴隷船の挿絵が重り合うのも物寂しい。防諜上の理由から兵士達は厠の外甲板に出ることは固く禁ぜられていた。だが極悪の環境を脱

- (宮崎) 下鶴虎盛少尉 (戦部) 福田准尉(不祥) 船橋は、まるで養蚕のようになり、三段に仕切られ、胡座をかいても頭が仕えて真っ直ぐ立てることはできない。そのような場所に背囊と装具を抱いた状態で詰め込まれ、足を延ばすことすら叶えられず、眠るのも坐ったままである。それに船室特有のペンキと重油の強烈な臭いに苛まれ、加えてエンジンの振動と熱気。明らかに窓一つない船艙の通路に揺らぐ裸電球に、幼い頃読んだ奴隷船の挿絵が重り合うのも物寂しい。防諜上の理由から兵士達は厠の外甲板に出ることは固く禁ぜられていた。だが極悪の環境を脱

- (宮崎) 下鶴虎盛少尉 (戦部) 福田准尉(不祥) 船橋は、まるで養蚕のようになり、三段に仕切られ、胡座をかいても頭が仕えて真っ直ぐ立てることはできない。そのような場所に背囊と装具を抱いた状態で詰め込まれ、足を延ばすことすら叶えられず、眠るのも坐ったままである。それに船室特有のペンキと重油の強烈な臭いに苛まれ、加えてエンジンの振動と熱気。明らかに窓一つない船艙の通路に揺らぐ裸電球に、幼い頃読んだ奴隷船の挿絵が重り合うのも物寂しい。防諜上の理由から兵士達は厠の外甲板に出ることは固く禁ぜられていた。だが極悪の環境を脱

- (宮崎) 下鶴虎盛少尉 (戦部) 福田准尉(不祥) 船橋は、まるで養蚕のようになり、三段に仕切られ、胡座をかいても頭が仕えて真っ直ぐ立てることはできない。そのような場所に背囊と装具を抱いた状態で詰め込まれ、足を延ばすことすら叶えられず、眠るのも坐ったままである。それに船室特有のペンキと重油の強烈な臭いに苛まれ、加えてエンジンの振動と熱気。明らかに窓一つない船艙の通路に揺らぐ裸電球に、幼い頃読んだ奴隷船の挿絵が重り合うのも物寂しい。防諜上の理由から兵士達は厠の外甲板に出ることは固く禁ぜられていた。だが極悪の環境を脱

- (宮崎) 下鶴虎盛少尉 (戦部) 福田准尉(不祥) 船橋は、まるで養蚕のようになり、三段に仕切られ、胡座をかいても頭が仕えて真っ直ぐ立てることはできない。そのような場所に背囊と装具を抱いた状態で詰め込まれ、足を延ばすことすら叶えられず、眠るのも坐ったままである。それに船室特有のペンキと重油の強烈な臭いに苛まれ、加えてエンジンの振動と熱気。明らかに窓一つない船艙の通路に揺らぐ裸電球に、幼い頃読んだ奴隷船の挿絵が重り合うのも物寂しい。防諜上の理由から兵士達は厠の外甲板に出ることは固く禁ぜられていた。だが極悪の環境を脱

- (宮崎) 下鶴虎盛少尉 (戦部) 福田准尉(不祥) 船橋は、まるで養蚕のようになり、三段に仕切られ、胡座をかいても頭が仕えて真っ直ぐ立てることはできない。そのような場所に背囊と装具を抱いた状態で詰め込まれ、足を延ばすことすら叶えられず、眠るのも坐ったままである。それに船室特有のペンキと重油の強烈な臭いに苛まれ、加えてエンジンの振動と熱気。明らかに窓一つない船艙の通路に揺らぐ裸電球に、幼い頃読んだ奴隷船の挿絵が重り合うのも物寂しい。防諜上の理由から兵士達は厠の外甲板に出ることは固く禁ぜられていた。だが極悪の環境を脱

- (宮崎) 下鶴虎盛少尉 (戦部) 福田准尉(不祥) 船橋は、まるで養蚕のようになり、三段に仕切られ、胡座をかいても頭が仕えて真っ直ぐ立てることはできない。そのような場所に背囊と装具を抱いた状態で詰め込まれ、足を延ばすことすら叶えられず、眠るのも坐ったままである。それに船室特有のペンキと重油の強烈な臭いに苛まれ、加えてエンジンの振動と熱気。明らかに窓一つない船艙の通路に揺らぐ裸電球に、幼い頃読んだ奴隷船の挿絵が重り合うのも物寂しい。防諜上の理由から兵士達は厠の外甲板に出ることは固く禁ぜられていた。だが極悪の環境を脱

- (宮崎) 下鶴虎盛少尉 (戦部) 福田准尉(不祥) 船橋は、まるで養蚕のようになり、三段に仕切られ、胡座をかいても頭が仕えて真っ直ぐ立てることはできない。そのような場所に背囊と装具を抱いた状態で詰め込まれ、足を延ばすことすら叶えられず、眠るのも坐ったままである。それに船室特有のペンキと重油の強烈な臭いに苛まれ、加えてエンジンの振動と熱気。明らかに窓一つない船艙の通路に揺らぐ裸電球に、幼い頃読んだ奴隷船の挿絵が重り合うのも物寂しい。防諜上の理由から兵士達は厠の外甲板に出ることは固く禁ぜられていた。だが極悪の環境を脱

- (宮崎) 下鶴虎盛少尉 (戦部) 福田准尉(不祥) 船橋は、まるで養蚕のようになり、三段に仕切られ、胡座をかいても頭が仕えて真っ直ぐ立てることはできない。そのような場所に背囊と装具を抱いた状態で詰め込まれ、足を延ばすことすら叶えられず、眠るのも坐ったままである。それに船室特有のペンキと重油の強烈な臭いに苛まれ、加えてエンジンの振動と熱気。明らかに窓一つない船艙の通路に揺らぐ裸電球に、幼い頃読んだ奴隷船の挿絵が重り合うのも物寂しい。防諜上の理由から兵士達は厠の外甲板に出ることは固く禁ぜられていた。だが極悪の環境を脱

- (宮崎) 下鶴虎盛少尉 (戦部) 福田准尉(不祥) 船橋は、まるで養蚕のようになり、三段に仕切られ、胡座をかいても頭が仕えて真っ直ぐ立てることはできない。そのような場所に背囊と装具を抱いた状態で詰め込まれ、足を延ばすことすら叶えられず、眠るのも坐ったままである。それに船室特有のペンキと重油の強烈な臭いに苛まれ、加えてエンジンの振動と熱気。明らかに窓一つない船艙の通路に揺らぐ裸電球に、幼い頃読んだ奴隷船の挿絵が重り合うのも物寂しい。防諜上の理由から兵士達は厠の外甲板に出ることは固く禁ぜられていた。だが極悪の環境を脱

- (宮崎) 下鶴虎盛少尉 (戦部) 福田准尉(不祥) 船橋は、まるで養蚕のようになり、三段に仕切られ、胡座をかいても頭が仕えて真っ直ぐ立てることはできない。そのような場所に背囊と装具を抱いた状態で詰め込まれ、足を延ばすことすら叶えられず、眠るのも坐ったままである。それに船室特有のペンキと重油の強烈な臭いに苛まれ、加えてエンジンの振動と熱気。明らかに窓一つない船艙の通路に揺らぐ裸電球に、幼い頃読んだ奴隷船の挿絵が重り合うのも物寂しい。防諜上の理由から兵士達は厠の外甲板に出ることは固く禁ぜられていた。だが極悪の環境を脱

- (宮崎) 下鶴虎盛少尉 (戦部) 福田准尉(不祥) 船橋は、まるで養蚕のようになり、三段に仕切られ、胡座をかいても頭が仕えて真っ直ぐ立てることはできない。そのような場所に背囊と装具を抱いた状態で詰め込まれ、足を延ばすことすら叶えられず、眠るのも坐ったままである。それに船室特有のペンキと重油の強烈な臭いに苛まれ、加えてエンジンの振動と熱気。明らかに窓一つない船艙の通路に揺らぐ裸電球に、幼い頃読んだ奴隷船の挿絵が重り合うのも物寂しい。防諜上の理由から兵士達は厠の外甲板に出ることは固く禁ぜられていた。だが極悪の環境を脱

- (宮崎) 下鶴虎盛少尉 (戦部) 福田准尉(不祥) 船橋は、まるで養蚕のようになり、三段に仕切られ、胡座をかいても頭が仕えて真っ直ぐ立てることはできない。そのような場所に背囊と装具を抱いた状態で詰め込まれ、足を延ばすことすら叶えられず、眠るのも坐ったままである。それに船室特有のペンキと重油の強烈な臭いに苛まれ、加えてエンジンの振動と熱気。明らかに窓一つない船艙の通路に揺らぐ裸電球に、幼い頃読んだ奴隷船の挿絵が重り合うのも物寂しい。防諜上の理由から兵士達は厠の外甲板に出ることは固く禁ぜられていた。だが極悪の環境を脱